

家庭の温度を上げましょう



家庭には温度がある——。その温度とは、温度計で測るものではありません。それは、「温かい霧^{ふんいき}囲^いみの家庭」あるいは、「冷たい霧^{ふんいき}囲^いみの家庭」と表現できる、その家族が自然とかもし出すある種の霧^{ふんいき}囲^いみや空気と言えるものです。

今月の『ニューモラル』では、「家庭の温度を上げる」をテーマに、円満な家庭づくりや子育てについて考えます。

「家庭の日」運動

全国の自治体で進められている運動の中の一つに「家庭の日」運動があるのをご存じでしょうか。

これは、昭和三十年、鹿児島県北西部



の鶴^{つる}田^だ町（現・薩^{さつ}摩^ま郡^{ぐん}さつま町）という人口約五千二百人の小さな町で生まれた運動です。

当時、鶴^{つる}田^だ町は水^{すい}稻^{とう}、畜^{ちく}産^{さん}、養^{よう}蚕^{さん}と

いった農業が盛んで、田植えや収穫の時期には学校が休みになり、子供も手伝いに借り出されるほどの忙しさでした。そうした中で、親と子の団欒といった親子のかかわりが少なくなり、「家族の絆が薄れつつあるのではないか、これになんとか歯止めをかける方法はないか」という声が起こってきました。それに加えて、ゆつくりと休めない農家のために「農休日」の必要性も叫ばれ、この「家庭を大切にしたい」「農休日」の二つの目的が合わさって「家庭の日」という、日本で初めての実験が産声をあげたのです。

現在では、多くの市町村で毎月第三日曜日を「家庭の日」と定め、「家族みんなで話し合いや団欒の時間を持つ」「家族みんなで食事をする」「家族みんなで地域で

の行事に参加する」などをスローガンに掲げ、地域の企業なども社会貢献活動の一端として協賛するなど、官民一体となった行事や活動が行われています。

昨今では幼児虐待や家庭内暴力など、悲しい事件や出来事が多発し、「家族の絆の希薄さ」が指摘されています。そうした問題の解決には、まずは家族が集い、心の通い合う「場」を大切にすることが基本であり、第一歩となるのではないのでしょうか。

とりわけ、子育てにおいては、日常生活の中で親子が触れ合い、語り合う時間をできるだけ多く持つことが、子供の豊かな人間性づくりには欠かせないと言えるでしょう。

「ゾウさんとライオンさん」

「お父さん、早くねようよ。今日もあの話の続きだよ」

東京近郊に住む佐々木さん一家には、幼い二人の子供がいます。お姉ちゃんのお香里ちゃん、年長組、弟の優司君は年少組で、二人は同じ幼稚園に通っています。

毎晩、二人は寝る前にお父さんにある物語をせがむのが、このところの佐々木家の恒例行事となっています。二人の幼子と一緒に布団に入ったお父さんは、コホンとひとつ小さな咳をしました。そして、思わせぶりに口を開きました。

「さーて、お待たせ。今夜もゾウさんと

ワニさんとライオンさんの冒険の始まり始まり……」

お父さんのその声に、二人の瞳は輝き、これから始まるであろう不思議なお話にもうすでに心を弾ませている様子です。

お父さんが二人に語って聞かせている物語は、幼なじみのゾウさんとワニさんとライオンさんが、住みなれたジャングルを抜け出して、憧れの大都会を目指し、山や谷を越え、急流を下り、大鷲に襲われたり迷子になったりしながら困難を乗り越えてたどり着くという冒険活劇ストーリー……。といっても、それはお



お父さんの思いつきの創作話で、子供たちを寝かせるために何気なく始めた物語でした。

それが二人の子供たちに大受け。お父さんは毎回ネタに困りながらも、都会を目指すゾウさんとワニさんとライオンさんの姿を、声色を変えたり、時に効果音を交えたりしながら、子供たちに語って聞かせているのでした。

そんなお父さんの苦心を知っているお母さんは、「お父さん、今夜はどんなお話をお子供たちにしてているやら。毎晩、大変だけど、あれだけ喜んでる子供たちの顔を見たら、頑張らなくちゃね」と、三人の様子を思い浮かべながら、思わず顔がほころんでくるのでした。

家庭の中に「おはなし」はあるか!?

この佐々木さん一家のように、夜寝る前、子供たちにお話や絵本などを読み聞かせているというご家庭は多いのではないでしょうか。

臨床心理学者の河合隼雄氏は、こうした「おはなし」の効用について次のように述べています。

河合氏が、かつてイギリスを訪れたときのことで。

「一カ月ほど前からアイルランドを経てこちらに來ましたが、その間に『おはなし』をたずねる旅をしています。(中略)

あるときは、屋外で『おはなし』を語

る人がいると、だんだんと人が集まってくる。話が終わると、それに心を動かさず、歌を歌う人や、詩を朗読する人まであって、みんなの心がひとつにとけ合っ
てゆくような体験をしました。あとで聞いてみると、お互いにはじめて会った人な人も知らない、という人もあった
ようで、このようにして『おはなし』が人間の心をひきつける力の強さを感じた
のでした。

こんなふうに『おはなし』は人の心と心を結びつける力をもっているのに、日本の家庭から『おはなし』が姿を消しか



けていないか、と心配になります。

みなさんは自分の子どものころに、お父さん、お母さん、あるいは、おじいさん、おばあさんなどに、『おはなし』を聞かせてもらった体験をおもちですか。そういう人は、おそらくその体験を非常になつかしく感じるでしょうし、その人に対しての心の結びつきを感じることでしよう。なかには、学校の先生のごしてくださった『おはなし』をよく思い出す人もあることでしょう。(中略)

どうかみなさんの家庭でもぜひ子どもに『おはなし』を聞かせてやってください。自分の好きな話であればどんな話でもいいのです。話をしながら、子どもの表情を見てください。どんなに目を輝かして聴いていることか。この表情の素晴



らしさに触れると、大人のほうもまた『おはなし』をしたくなるでしょう。(中略)
私はそんなおはなしなどできない、という方には、絵本の読み聞かせをおすすめします。(中略)

子どもが寝るときなどに、絵本をいつ

しよに見ながら読んであげるとよろしい。欧米では、これをお父さんがしていることが多いようです。お父さんと子どもの心が通い合う時間として、非常に大切なものと言えるでしょう。

子どもは好きな絵本ができると、それを何度も読んでくれと言わずです。おはなしを完全に覚えてしまってもこう言うのはふしぎに思いますが、そうすることで親との心の結びつきをたしかめているのでしよう」

（『困ったときの子育て相談室』創元社）

子供にお話や絵本の読み聞かせをすることは、日常のささいな出来事のひとつと言えます。また、前述の佐々木さんの「おはなし」は、思いつきの創作話ですから、言ってみればまったく馬鹿げた話

のようにも思います。しかし、父親が語り、子供たちが聞き入り、家族で「おはなし」を共有するうちに、親と子の間に心のつながりが生まれてくるのです。

こうした親と子の触れ合いは、少し心にゆとりがあれば、日常生活の至る所に発見することができます。忙しい毎日の中で起こる出来事を、ささいなこと、つまらないことと考えて見過ごせば、ただそれまでのことです。しかし、その中に「親子の触れ合い」や「家族の絆」という価値と意味を見出すことによって、ささいな出来事が光り輝く大切な出来事に変わり、「家庭を温かくする」ことに役立つていくのです。それは私たちの心の持ち方ひとつ、物事の考え方やとらえ方ひとつであると言っていいてでしょう。

家庭の温度を

上げる

さて、本誌で連載中の「心づかいQ&A」の回答者であった穂苜満雄さん（財団法人モラロジー研究所講師部顧問）は、家出を繰り返す高校二年生の娘と、相談しても取り合ってくれず、いつも喧嘩が絶えない夫について悩む四十代の母親からの相談に対して、次のように答えています。

「子どもの問題行動をつくり出す一つの原因に、両親の不仲ということがあるようです。両親が争ったり対話がなければ、家庭の中は自然に冷たくなり、子ども

もは非行に走ったり、家出をしたりするのです。

そこで、あなたのお宅の温度を上げてみてはどうでしょうか。自分の家の中が外の温度よりも温かかったならば、子どもは外へは出て行きません。

私のいう温度とは、人間としてのふれあいの温度のことなのです。娘さんが、家で親というほうが温かいと感じるなら、外へは出て行かないと思います。

帰宅した娘さんに、すぐ『どこへ行っていたの？ お母さんがどんなに心配していたか分からないの！』と叱ったり、うるさく文句を言ったりしていませんか。確かに、娘さんの言動を心配するのは、親として当然のことです。しかし、子どもは、それを親の愛情とは受けとめ



ず、『うるさいなあ、世間体せけんたいばかり気にして』と思っているかもしれません。

そこで、娘さんが家出して帰ってきたとき、『あれっ!』という感じをもたせることです。今までと何かが違うという『あれっ!』です。それは、理屈りくつではなく、家の雰囲気がかもし出すものです。つまり、夫婦の仲むつの睦まじさ、母親の笑顔、やさしい言葉の語りかけなどでつくられていくものです。

このような対応を続けていくうちに、家庭の中の温度もだんだんと上がって、雰囲気も和なごやかになっていきます。(中略)

結局、親である夫婦が、健康で仲良く生活していくことが何よりの基本です。その姿を見て、娘さんも『今までとは家



の雰囲気違ってゐる」と感じ、家出も
少なくなつていくことでしよう」

（『心づかいQ&A 感謝の心が人生を変え
る』モラロジー研究所）

私たち一人ひとりを一隻の船にたとえ
るならば、家庭は船が帰還する港に当た

ります。夜の帳が下りた海の中にあつて、
遠く港の温かな灯りが見えたときに感じ
る安堵感。それは家庭にも当てはまりま
す。家庭の温かさは、家族の安らぎと喜
びを増幅してくれるものなのです。

私たちができることを考える

親と子の心を育て、家族の絆を深める場は、「家庭」にあります。そして、その家庭の温度を高め、家族の幸せを築いていくのは、他人ではなく、当事者である家族一人ひとりが力を合わせていくしかありません。

ここで家庭の温度を上げるために、私たちはどのようなことができるでしょうか。

- ① 明るい挨拶を心がける。
- ② 肯定的で美しい言葉を多く使う。
- ③ 家族みんなで食卓を囲む機会を持つ。
- ④ 朝、家族と握手をして出勤する。

- ⑤ 子供の話を聞くときは素直に耳を傾ける。
- ⑥ 家族の長所を見つけ、褒める。
- ⑦ 子供はお手伝いなどを通して家族の一員としての役割を担う。
- ⑧ 家族みんなで力を合わせて家の仕事や作業をする。

そのほかにもまだまだたくさんありそうですね。家庭の温度を上げるために、一度、機会をつくって家族全員で話し合ってみてはいかがでしょうか。家族が集まって話し合う、そのこと自体がすでに「家庭の温度を上げる」ことにつながっています。

より良い家庭づくり、 より良い社会づくり

人間学が専門である長島正氏は、家族や家庭の姿について八木重吉の詩を引用しながら、次のように述べています。

「詩人八木重吉は、結核と生活苦と闘いながら、登美子夫人と二人の幼い子どもに囲まれて、わずか数年間ではあっても心の燃えるような短い生涯を送りましたが、彼は、『愛の家』と題する短い詩を残しています。

まことに 愛にあふれた家は
のきばから 火をふいているようだ



それは、誰もが憧れる家庭の永遠の風景に違いありません。しかし、私たちが身を置いている現実には、ある心理学者をして『ホテル家族』とか『家庭のない家族』と言わしめるほどに、往々にして対話も滞りがちでかわりに乏しく、火種の消えそうな家庭の姿に象徴されがちです。(中略)

今、私たちに求められていることは、たとえ『のきばから火をふく』ほどではないにしても、家族が互いに相手に向けて心を開き、集い合うひとときをまず確保することにあるようです」(『親と子のかわり』金子書房)

家庭は私たちの生活の基盤であり、家族一人ひとりの心のよりどころです。毎日を共に過ごす家族だからこそ、一人ひ

とりの存在の素晴らしさを認め、家族であることの有り難さとその大きな価値をかみしめたものです。

さらに、家庭と社会は密接な関係にあります。より良い家庭づくりは、より良い社会づくりにつながります。私たちは、より良い家庭づくりを通じて、地域社会にも積極的に働きかけ、より良い社会づくりに貢献していきたいものです。

